In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	大阪市立大学における教職課程履修カルテを用いた面接指導の実践報告
Author	上森, さくら / 平野, 拓朗 / 添田, 晴雄
Citation	大阪市立大学大学教育. 12 巻 2 号, p.1-6.
Issue Date	2015-03
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-093

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

■ 報告

大阪市立大学における教職課程履修カルテを用いた面接指導の実践報告

A Report on Practices of Face-to-Face Individual Conference with 'Teacher Training Course Progress Chart' at Osaka City University

上　森　さくら
島根大学[1)]
平　野　拓　朗
大阪女子短期大学[2)]
添　田　晴　雄
大阪市立大学文学研究科

UEMORI Sakura
Shimane University
HIRANO Takuro
Osaka Women's Junior College
SOEDA Haruo
Osaka City University

抄録

大阪市立大学の教職課程では、全ての学生が「教職実践演習」の履修の前提として「教職課程履修カルテ」を用いた個別面接指導を受けることになっている。本稿では、この指導を受けた学生ひとりのケースを分析し、その学生が、①教師になるための具体的な課題を把握したこと、②自らの教育に対する考えの偏りに気づいたこと、③学外での経験と教師としての成長を結びつけていったことを明らかにし、「教職課程履修カルテ」の実践が、「教職実践演習」の目的の一部を前倒しして達成していることを示した。

キーワード：教職課程、面接指導、教職課程履修カルテ
Key Words:：teacher training curriculum, face-to-face individual conference, teacher training course progress chart

はじめに

2009年に教育職員免許法施行規則が改正され、大学における教職課程の必修科目として「教職実践演習」の設置が義務づけられた。その目的は、学生が「この科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになること」（文部科学省、2006）であり、「教職実践演習の進め方についての参考とすることや、個別の補完的な指導等に活用」（文部科学省、2011、243頁）するための教職課程履修カルテの作成が義務づけられた。そこで大阪市立大学では、「教職課程科目評価シート」および「教職課程自己評価シート」（以下では「科目評価シート」、「自己評価シート」）から構成される「教職課程履修カルテ」を設計した。「科目評価シート」は、課程科目の各担当教員による評価を集約しプリントアウトしたもので、学生には、２年次以降、毎年１回（４年次においては「教職実践演習」の授業中）、それを閲覧させ、それを踏まえて、「自己評価シート」を作成させることにした。

文科省の施策として、カルテと連動した「教職実践演習」の実施時期は４年次の後期と定められている。上述したように学生は卒業間際の時点で課題を把握して不足している知識や技能を補うことになっているが、本学では、この課題把握の機会を教職課程履修中の２年次、３年次にも確保し、「不足している知識や技能等」の「補い」を教職課程履修期間全体にわたらせる方がはるかに効果的であると判断した。また、学生

がひとりで「自己評価シート」を書くのはかなり困難であると考えた。そこで、「教職実践演習」の一部機能を前倒しして、2年次、3年次に、ひとりあたり30分程度の教職課程カルテを使用した面接（以下では「カルテ面接」）を行うことにした。

大阪市立大学はいわゆる非教員養成系大学（＝一般大学）であり、中高合わせて22種類の免許状に対応した課程を提供している。免許状を取得する学生は、毎年、約150名である。研究型の総合大学で学んだ専門性の高さや視野の広さを活かすことによって、「探究力を持ち」「教職生活全体を通じて学び続ける教員」（文部科学省、2012、1～2頁）として、学校教育を牽引していく人材を輩出していくことを本学は使命としている。学生の多くはいわゆる受験エリート校出身であり、中高一貫の私学出身者も少なくない。一方、公立学校の教員採用試験に合格して実際に赴任する学校の生徒像、教師像、教育観は、出身校のそれらと極めて異なっていることが少なくない。

本稿では、大阪市立大学で行われた教職カルテ面接の実際のケースを1例とりあげ、カルテ面接の実践が、どのようにして「教職実践演習」の目的の一部を前倒しして達成していたかを考察することにする。分析にあたっては、2年次および3年次のカルテ面接の際に担当者が残した記録を手がかりにし、かつ、4年次に該当学生に検証インタビュー（後述）を行うことにより、2年次、3年次のカルテ面接の意義を裏付けることにした。

1．教職カルテ面接の実施手順と面接の際に基盤としている理念

面接室を訪れた学生は、まず、自身の「科目評価シート」を閲覧し、これまでの大学での履修状況を参考としながら、「自己評価シート」への書き込みを行う。シート上の質問の趣旨が理解できない場合は学生からの質問を受けつける。ただし、シートに正しく書き込むことが目標ではなく、シートに書き込むことによって自己評価を深める契機とすることが目的であるので、担当者の回答はその趣旨にそったものに限定する。

その後、面接者の質問を手掛かりとして自らの（被）教育経験について語ることになる。具体的には、①教職課程で学んだことを使っての（被）教育経験の再解釈を求めること、②それを踏まえてどのような教師になりたいか問うこと、③教職課程で学ぶことが学校教育現場以外でどのように役に立つのか考えさせることになる。

とくに、1回目となる2年次のカルテ面接では、学生の視野の狭さを指摘して、学生の思考にゆさぶりをかけることが主となる。例えば、高校教師の働き方が学生の出身校である進学校での働き方しか想定されていなかったり、中学で働く方が高校で働くよりも楽であるという偏見を持っていたりすることに対して反例を示すなどしている。

2回目である3年次のカルテ面接では、担当者によって記録された2年次当時の質問がもう一度学生に投げかけられる。そして、前回の面接からの学習経験が、学生の視野をどのように広げたのかを中心に面接が展開する。さらに、教育実習を前にしてどのようなことを学ぶ機会にするのか、学生自身が固有の目標を立てられるよう面接を通して支援することになる。

面接担当者の姿勢として重視しているのは、ナラティヴ・アプローチを基軸とした構成主義の立場に立つアクティヴ・インタビューの考え方（Holstein & Gurbrium、1995、pp.58-59）などである。紙幅の関係上、詳述はできないが、おおよそ次のようなことを考えている。もとより、面接は講義ではないので、面接者の価値観を一方的に伝える場ではない。学生の語りを導くことが肝要である。しかし、それにとどまらず、語るという行為自体と面接者の問いとによって、学生のもっていたさまざまな解釈、たとえば、教師の資質・力量についての理解、子ども観、教育観、学校観などについての解釈を、学生自身が変容させ、新しい意味を紡いでいく、それを支援するような面接となるよう心がけている。

2．「カルテ面接」のケース分析

⑴　調査協力者と調査手続き

「カルテ面接」の果たす役割を検討するにあたって、2年次と3年次に「カルテ面接」を経験した4年生のAさんに調査目的を伝えた上で協力を依頼した。Aさんの概要は（表1）の通りである。Aさんは、教

員の校種を中学校から高校に変更したものの、一貫して教員を志望し、学部卒業後に教員となっており、本学の教職課程履修学生の典型といえる。Ａさんは、１回目の「カルテ面接」（２年次）を2011年５月７日に受け、２回目（３年次）を2012年７月26日に受けた。担当したのはいずれも上森である。

筆者らは上森による２回の面接記録を分析した。その上で、Ａさん本人が「カルテ面接」の経験をどう考えていたかについて検証するため、検証インタビューを行った。検証インタビューは客観性を担保するため、後任の平野が行った。同インタビューはＡさんが４年次であった2013年８月16日に行った。この時期は中学校での教育実習を終えて教員採用試験の最終結果を待っている時期であり、「教職実践演習」を受講する前にあたる。

検証インタビューは、半構造化面接の方法をとり、１時間半程度かけた。また、本人の了解をとり、録音した。

（表1）調査協力者の概要

協力者	性別	面接時期	取得免許	１回目面接時の希望進路	２回目面接時の希望進路	卒業後の進路
A	女性	2011年５月 2012年７月	国語（中・高）	中学教員	中学教員	高校教員

⑵　Ａさんの「カルテ面接」経験

以下ではＡさんの「カルテ面接」経験について次の手順で考察する。まず２回の「カルテ面接」について、面接記録を基にどのような面接が行われたのかを確認し、検証インタビューを基にＡさんが各面接をどのように受け止めていたのかを確認する（①１回目の「カルテ面接」について、②２回目の「カルテ面接」について）。そして、２回の「カルテ面接」の経験を通して、Ａさんがどのような影響を受けたと４年次に考えていたかを確認する（③学生にとっての「カルテ面接」）。

①１回目の「カルテ面接」について

【面接記録より】

まず希望進路として中学校教員の採用試験を受験することを確認した後、主にＡさんの理想の教師像について話してもらった。ここで、Ａさんの理想の教師像が進学校であった高校での被教育経験に強く影響されていると感じたカルテ面接者は、「様々な生徒がいる公立中学校で、母校の理想の教師像のまま振る舞っていいのだろうか？」という趣旨の問いを投げかけた。Ａさんの理想の教師像の話しぶりから、Ａさんが生徒像についても「～～であるべき（あるはず）だ」という強い理想像を持っているのではないかと面接者が感じたためであった。Ａさんはその問いについて答えを探してはいるものの、その問いの重要性が共有できたようにはカルテ面接者には思われなかった。他に、理想の生徒像と異なる言動の生徒がいること、そのような言動の背景を探ろうとすることが教師にとって必要であることをカルテ面接者は伝えた。最後に、教育実践誌を読んだり、教員サークルなどを探してみたりすることを勧めてみたところ、既に尊敬する教員とともに地元の教員サークル等に参加しているという返事があった。

面接終了後の所見には、Ａさんに対する印象が、「成績もよく、とても生真面目な様子がうかがえる」と書かれていたものの、「（このまま課題が）自覚されなかったら、教員になった時の指導は硬直的になってしまうだろう」と記載されていた。

【４年次の検証インタビューより】

Ａさんが語ったところによると、１回目の面接時には、自分の進路に関しては既に定まっているものの、「教員採用試験に向けて、何をどのように取り組めばいいのかが分からず不安だった」こと、また、学校ボランティア等の活動を通して、教師に成るためには、「自分が人間的にどういうふうに成っていくべきなんやろ」、「どういう技能を身につけていくべきなんやろ」という思いを抱え、面接に臨んでいた。その面接で印象に残っていることをＡさんは次のように語った。

> 進学校に通ってたんで、みんな東大、京大行くような学校だったんで、そういう子らを前にしてその先生が「人間力も高めないといけない」って言ったのが印象に

残ったって言ったら、（面接者から）普通の中学生にそれを言ったら「はぁ？勉強もしんどいのに」ってなるよ〔反発されるよ〕って。それをどんなふうに下ろしてくるかっていう。で、答えられなくて……

Ａさんも、高校における被教育経験をより一般的な中学校での教育実践に位置づけ直すことが面接者に求められていたことを認識していた。しかしながら、その問いは彼女の手持ちの言葉では応じることが難しいものであった。

②２回目の「カルテ面接」について

【面接記録より】

まず、希望進路に変更がないことが確認された。その後、個別指導の塾での事務員としてのアルバイト経験に基づいて、学校での授業についての考え方や子どもの観方について話した。Ａさんの母校である進学校の生徒は「勉強は（少なくとも教師の前では）前向きに取り組んで、あたりまえ」であったのに対し、アルバイト先で出会う中学生の中には「だるい」「しんどい」と口にして勉強に後ろ向きであることを隠さない生徒もいることが語られた。Ａさんは各生徒がそれぞれ抱えている困難を理解・共感していくことが大切であるということを大学の講義等によって知ってはいるものの、どのように生徒を学業に前向きに取り組めるようにするべきか、その方法を模索中であることを語った。カルテ面接者はこのエピソードにより、Ａさんの内にある「～～であるべき生徒像」と現実との乖離に直面し悩んでいると把握した。その上で、１回目の面接時に課題として把握していた理想の教師像や生徒との応答関係を再考させたいという意図を持って、「塾の講師といっても様々な人がいるし、様々な対応があるから、各講師の対応の違いや、その対応の違いがどんな見立てから行われているか比較できるといいね。そこから得ることは大きいと思う」と語った。また、常に実践を解釈していく重要性を確認し、教育実習で常に理論と実践の往還が意識されるよう語り掛けていた。

【４年次の検証インタビューより】

「カルテ面接」によって子どもの観方が変わったことについて、Ａさんは次のように語った。

ボランティアしてても、子どもの暴言や、やんちゃな態度とかを、表面じゃなくって、根底に何があるんやろって考えるようになったと思います。家庭の事情であったり、怒りを教師に対して向けてるように見えて、実は自分に向けてるんじゃないかとか。今までは「なんやねん、こいつ」とか「苦手やわ」と思っていた生徒に対しても、相手の怒りを分析するとか、冷静に見るというのを心掛けてみようって。

このように、「カルテ面接」での会話を経て、乱暴な言動の背景にある子どもの内心にまで注意を向けようと、Ａさんは自らの子ども観を変容させていた。

③学生にとっての「カルテ面接」

【４年次の検証インタビューより】

Ａさんは２回の「カルテ面接」を通して、面接時に最初は自分一人で意味づけられなかった教育経験に対して言葉を与え、整理できたことを語った。

自分のもやもやしてたものやぼんやり考えてることを整理してくれて、「こういうことやね？」って言ってくれたっていうのは、「あ、そうか」っていう自分の整理になりました。（中略）何で関わりたいと思うようになったのかっていうことですね。具体的にこういうことしたいって言ったら、「それは生徒指導に重きを置いてるんやね」って言われて、それで「生徒指導」っていう単語をもってきてくれたり、とかですね。

そして、Ａさんは教育実習後に中学の教員志望から高校の教員志望に進路を変更した理由を次のように語った。

生徒指導は現実問題大変やな、って思ったことが大きいですね。問題行動であったり、男女交際等にまつわる情緒不安定な生徒の問題があったり、そんなことまでか、と。あと、いじめにまつわる保護者対応ですね。あたりまえなんでしょうけど、現場に入ったら。生徒指導にそういうことがあるというのは分かってたんですけど……。

中学生は絶対、嫌って思ったわけじゃなくて。良いところもあると思うんですけど（中略）精神面が高校生の方が大人。日本語が分かるというか。私の日本語が理解できるというか、私も生徒のしゃべってる日本語が理解できる。教育実習する中で、中学生の発言に対してうまく返せないと思ったんですね。中学生はなぜか、おもし

ろいことを言えよって感じで寄ってくる。何かを期待している眼。彼らのレベルに合う笑いというか、「おもしろい返しを、こいつら求めてるな」って思いましたね。（それを受けて、中学生は）無理だって思いましたね。

このように、Ａさんの内にある「～～であるべき（あるはず）生徒像」との実際の生徒との乖離が教育実習で再確認され、Ａさんは高校教員志望に進路変更したと語った。

３．「カルテ面接」経験についての考察

ここでは、面接中のＡさんが語るという行為自体と面接者の問いとによって、Ａさんが持っていた教育に関する様々な解釈がどのように変容していったのかを面接の効果として検討する。

１回目の面接前、Ａさんの第一の関心事は教員採用試験対策であり、実際に教員として働き始める自身の姿への問いは漠然としたものであったことが検証インタビューで語られた。面接者はＡさんの語りの中で、Ａさんが理想としている教師像や生徒像が、それまでの被教育経験の中で「～～であるべき（あるはず）」と硬直的であることを捉え、その点を問題視する問いを投げかけた。この問いは、１回目の面接の中で最も印象に残った問いとして、答えられない自分自身と共にＡさんによって記憶されており、検証インタビューで語られた。ここでは理想の生徒像と一致しない子どもをどのように観て指導していくのかという具体的な場面の提示により、Ａさんと面接者双方がＡさんの教師として成長していくための課題の把握を行っている。

２回目の面接でも主な話題は理想の生徒像と一致しない子どもをどのように観て指導していくのかということが主な話題であった。ここでの具体的な場面は、Ａさんの塾でのアルバイト経験であった。ここで、面接中の話題が学校教育に限定されず、広く教育に関する経験を話題の対象としながらも、教師として成長する上での課題と結びつけて吟味することに対する一定の了解がＡさんと面接者の間で出来上がっている。このことは、検証インタビュー時に２回目の面接後、Ａさん自らがボランティア経験も吟味の俎上に載せていたことから明らかである。

２回の面接を終了した後も、アルバイトやボランティア活動の経験での生徒との指導や交流の中で、Ａさんは自らの課題である理想の生徒像と一致しない子どもへの指導を模索し続けていた。しかしながら、Ａさんは教育実習で出会った生徒たちの要求と理想の指導のあり方に折り合いをつけることを諦め、進路変更を行った。進路変更したという結果だけを見れば、理想と現実の乖離からの逃避である。しかしながら、課題を早くから認識し、大学での講義や面接者との会話を手掛かりにしながら、アルバイトやボランティア活動の経験での模索を踏まえた上でのＡさんの決断は、自らの課題と適性を充分に見つめた上でのものであり、尊重されるべきものであるだろう。また、高校教員として働き始めた後も、理想の生徒像と現実の生徒との乖離は常に存在する。この点に関して、Ａさんは既に面接を通して、自身にとっての課題の一端を自覚し、溝を埋める努力をどのようにするべきかを模索し続けてきた。このことは教職生活をより円滑にスタートする一助となっていると考える。

このようなＡさんの成長（自身の課題把握と探求）を支えたのは、次の３点に基づいた自身の経験の省察・総合化であると考えられる。第一に、面接では教師として成長していくための具体的な課題をＡさんと教員が共に把握してきたことである。その中で、面接者は、Ａさんの教育に関する知識・経験等を整理したり、新たな枠組みを提示したりしながら、Ａさんが自身の具体的な課題を把握することを目指していたのである。第二に、面接者と共に行ったＡさんの被教育経験の再考を通して、Ａさんが自らの考えの偏りに気づいていくこととなったことである。第三に、ボランティア活動やアルバイトでの経験等、大学外での学びや経験を、教師としての成長に結びつけながら考えていく視点を獲得し、それを通して、自身の経験を総合的に成長に結びつけて把握する視点を学生は獲得していたことである。

おわりに

本稿では、「カルテ面接」の実践がどのようにして教職カルテの実質化につながり、「教職実践演習」の目的の一部を前倒しして達成していたかを考察するた

めに、Ａさんに協力を依頼し、「カルテ面接」の効果とそれを支える学生の省察と総合化のポイントを検討した。

Ａさんにおける「カルテ面接」の効果とは、教職生活をより円滑にスタートするための教師としての課題の自覚と、それに基づいた自身の経験の省察・総合化であった。それを支えたのは、第一に、面接の語りの中での具体的な課題の把握である。その際、面接者は、Ａさんの教育に関する知識・経験等を整理したり、新たな枠組みを提示したりすることに努めていた。第二に、Ａさんの被教育経験を面接者と共に再考することで、Ａさんは自らの考えの偏りに気づいていった。第三に、大学外での学びや経験を、教師としての成長に結びつけながら考えていくことで、自身の経験を総合的に成長に結びつけて把握する視点を学生は獲得した。以上の過程を経ることで「カルテ面接」は学生に効力を持つことが示唆された。

このように「カルテ面接」は、各学生の被教育経験の意味づけや整理に留まらず、学生自身の省察の仕方に変容を促し得る。そして、そのためには、学生の教育に対する認識における癖や偏りに注目し、それを教育実践上の新たな意味として位置づけ直すための複数の観点を認め、提示していくことが必要である。

本稿では、本校の教職課程に在籍し、一貫して教職を目指して実際に卒業後から働き始めた学生を対象に検討を行った。今後は教職課程に在籍しながらも、教員採用試験受験を迷っている学生や、教職を志望していない学生にも焦点を当てて「カルテ面接」の意義を報告していきたい。

注

１）元大阪市立大学2011 ～ 2012年度「カルテ面接」担当者
２）元大阪市立大学2013年度「カルテ面接」担当者

引用

Holstein, J. A. & Gurbrium, J. F.(1995), The active interview, SAGE Publications.
文部科学省（2006），中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006年７月11日）.
文部科学省（2011），「教職課程認定申請の手引き（平成23年度改訂版）」.
文部科学省（2012），中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（2012年８月28日）.